

# 2025年4月例会 『中山法華経寺の探究と葛飾八幡宮』

【2025.4.19】

## 市川・市名由来

市川市は昭和9年11月3日に、市川町、八幡町、中山町、国分村の3町1村が合併して誕生したものです。この「市川市」は、上下、左右どちらから読んでも市川市という簡潔な名称である所から付けられた市名だといえます。

市域の中央部にある所から市役所が置かれ、交通の便から総武線に本八幡駅が設置されました。

## 中山地域のあらまし

中山は、日蓮宗の大本山《法華経寺(ほけきょうじ)》が存在することで知られています。この《法華経寺》は、日蓮聖人に帰依した若宮の領主富木常忍(ときじょうにん)と、中山の領主大田乗明(おおたじょうみょう)の子日高(にちこう)とが共に館の内部に堂を建て、それぞれ寺院として法華寺、本妙寺と称したのですが、のちに合体して一つの寺となり、《法華経寺》と号するようになりました。

富木常忍は、日蓮聖人の入滅後出家して日常(にちじょう)と号しました。《法華経寺》はこの日常上人が開山しております。日常上人以降歴代の住職は、日蓮聖人の遺文、遺品を大切に保存し伝えてきました。それらは今日、国宝、重要文化財に指定されて聖教殿(しょうぎょうでん)に保管されています。法華経寺は日蓮聖人に関係した遺品の最も多く保存されている寺院です。

また、この他にも建造物、絵画等重要文化財に指定されているものも多く、市内での指定文化財の約4分の1が法華経寺にあります。

境内やその周辺には塔頭(たっちゅう)寺院が多く、江戸時代頃からは千葉街道(国道14号線)から《法華経寺》に入る参道が門前町として発達し、各地から参詣にくる信者によって賑わいました。この中山の周辺には日蓮宗に関係した信仰上の伝説が多く残されています。

## 八幡地域のあらまし

八幡は市川市の中央部に位置し、八幡(やわた)の地名の由来となった《葛飾八幡宮》は平安時代に創建された神社を中心に発展したまちです。

この地域は東京湾に面した砂浜「市川砂州(いちかわさす)」と、真間の入江の湿地帯に挟まれている。「市川砂州」上に奈良時代に制定された東海道は、江戸時代も房総の大名の参勤交代の街道として、道中奉行支配下の八幡宿(やわたしゅく)が設けられ、街道筋は栄えました。今は八幡の中央を通る国道14号線です

又、八幡の土地は砂地「市川砂州」であるため農作物には適さず、この地に適した特産品を作り出すほかはないと、悩ませていましたが、砂地に梨栽培が適していることを知りました。

精魂を込めた川上善六(ぜんろく)が、ついにその栽培に成功「八幡梨」として世に広めました。この梨栽培はやがて四方に広まり「市川梨」へと発展し、今日のように市川市の特産物とまでなったのです。

## 《 中山法華経寺 (なかやまほけきょうじ) 》

日蓮宗最古の大本山の寺院です。鎌倉時代の文応元(1260)年創立で、山号は正中山(しょうちゅうざん)で所在地名である中山の由来になったとの説もある。



日蓮はその布教活動のなかで幾度となく迫害を受けたが、その際、千葉氏に仕えていた富木常忍(日常)や大田乗明は管轄していた八幡荘に日蓮を迎え入れ保護した。特に千葉氏の被官であった富木常忍(日常)は、日蓮のため若宮の自邸に「法華堂」を造営し安息の場を提供するとともに、文吏であったため紙筆を提供してその執筆を助けた。

当寺に多くの日蓮の遺文が遺されているのはその縁であると言われている。

### 〈 総門(黒門) 〉

朱塗りの〈赤門〉に対して、黒塗りのため〈黒門〉の通称で呼ばれます。江戸時代のお城によく見られる高麗門という

形式で、控柱に支えられた2本の本柱に銅板葺きの屋根が乗っただけのシンプルで豪快な造りです。

中央に掛かる扁額は掛川城主・太田資順の筆によるものです。

### 〈 仁王門(におうもん)〈赤門〉 〉

朱塗りのため通称〈赤門〉と呼ばれます。何度も災害に見舞われましたが、そのたびに再建されてきました。現在の〈仁王門〉は大正時代に建てられたものです。その名前の通り左右に仁王像が置かれています。

扁額の「正中山」の書は寛永三筆の一人、本阿弥光悦の筆によるものです。

### 〈 五重塔 〉

江戸時代以前の〈五重塔〉としては千葉県唯一です。元和8年(1622)年、本阿弥光室(本阿弥光悦の甥)が両親の菩提を弔うために、加賀藩主前田利光公の援助を受けて建立しました。

細かな装飾が少なく、同時代の本門寺(東京都大田区)、浅草寺(東京都台東区)に比べほっそりとした外観です。

春の桜、秋の紅葉と、どの季節も絵になる中山のシンボルともいえる建築物です。

〈五重塔〉の規模は総高 30.7m、初重の幅 4.8m で相輪の長さは 8.3m です。構造は中央に心柱(しんばしら)が通り五重の屋根上まで伸びて相輪を乗せています。初重のみが部屋となっており、二重以上は構造材が組まれた屋根裏です。(1階建仕様)

### 〈 日常聖人像 〉

法華経寺を開いた日常(初代貫主)は下総国守護千葉氏の被官で、下総国八幡荘若宮に住んだ。

建長 5(1253)年、日蓮の法華宗義に帰依し、下総における日蓮門下の有力な信者となった。その識字力の高さなどを見込まれて「観心本尊妙」をはじめ多くの書状を日蓮から送られた。

### 〈 祖師堂(そしどう) 〉



日蓮宗の祖、日蓮と歴代六祖を祀るお堂。現在の祖師堂は延宝 6(1678)年建立で、その後、数回の改修を経て、昭和62年から平成9年にかけての解体修復工事により、建立し当初の姿に復元されました。

建築様式は非常に珍しい「比翼入母屋(ひよくいりもや)造り」というもので、他に吉備津神社(岡山県)で見られるだけです。側面から見ると、大きな屋根が二つ重なって見えるのが特徴です。

### 〈 四足門(しそくもん) 〉

もともとは愛染堂にあったものを移築して、《法華経寺》本院の玄関門としていました。再度移築され、現在の位置におかれています。江戸時代に建造された五重塔などと異なり、室町時代の様式による細かな装飾や、柔らかに曲線を描く「海老虹梁(えびこうりょう)」という梁が特徴です。

### 〈 法華堂(ほっけどう) 〉

《法華経寺》を開いた富木常忍(日常)が文永年間(13世紀後半)銭四貫文で若宮の館に建立し、後に現在の場所に移されたと伝えられています。現在の建物は様式から室町時代後期の再建と見られ、日蓮宗の本堂としては最古に属し、室内には釈迦如来像と四菩薩像が置かれています。

### 〈 荒行堂(あらぎょうどう) 〉

日蓮宗の祈禱根本道場で、11月1日(大荒行入行(にゅうぎょう)会)から2月10日(大荒行成満(じょうまん)会)までの百日間の荒行が行われる。この修行には全国から約100名の僧侶が挑戦します。

全ての日蓮宗の僧侶に課せられる修行ではなく、秘法を身につけたい自らが志して挑むものです。この修行を終えた僧侶だけが、日蓮宗のご祈禱を行うことができます。

〈荒行堂〉では、毎朝2時に起床、寒水に身を清める水行を1日7回行い、お堂の中でひたすらお経の読誦と写経を続けます。麻の清浄衣(死に装束)を着用し、足袋をはくことは許されず、常に素足で修行します。

食事は朝夕2度の白がゆ、家族や友人と連絡を取ることも許されず、もちろんテレビや新聞からの情報を得ることもできません。

### 〈 聖教殿(しょうぎょうでん) 〉

「立正安国論(国宝)」「観心本尊抄(国宝)」「日蓮自筆遺文(国指定重要文化財)」など日蓮ゆかりの貴重な資料を保存するために(財)聖教護持財団の篤志(とくし)により、日蓮宗内外の援助のもとで昭和5年完成。外壁は石造りで、当時の宗教建築の権威伊東忠太東京帝国大学教授が設計しました。様式はインドの仏塔風で、境内の建築の中でも異彩を放っています。資料を災害、湿気などから守るために、換気扇、避雷針等さまざまな工夫がこらされています。

## 《 葛飾八幡宮 (かつしかはちまんぐう) 》

平安時代に創建され、“八幡”の地名の起こりにもなった由緒ある神社、地元では「はちまんさん」の愛称で知られています。

寛平年間(889-898)宇多天皇の勅願(ちよくがん)によって、京都岩清水八幡宮を勧請(かんじょう)したものです。



### 〈 駒どめの石 〉

源頼朝は、治承4(1180)年以仁王(もちひとおう)より平氏追討の令を受けて挙兵したが、一敗地にまみれ、安房国に逃れた。再起を図った頼朝は千葉氏等の援軍を得て、下総国府に参会した折、《葛飾八幡宮》を参拝し戦勝と武運長久を祈願した。その折、頼朝の馬が前脚を掛けてひづめの跡を残したことから〈駒どめの石〉と言われる。やがて武人の守護神として広まり、太田道灌、徳川家康などの武人の崇敬を集めました。

そして明治維新までは、天台宗の「八幡山法漸寺(ほうぜんじ)」が別当寺として管理していましたが、廃仏毀釈(はいぶつきしゃく)によって廃寺になりました。社殿の前の鐘楼は神仏習合(しんぶつしゅうごう)の名残です。

また山門に安置されていた仁王像は行徳の徳願寺に移され、その後には左大臣、右大臣の像が置かれて「随神門」と呼ばれる様になりました。

### 〈 千本イチヨウ 〉

本殿右側のイチヨウは〈千本イチヨウ〉と呼ばれ、《葛飾八幡宮》のご神木として代々大切に保護されてきた樹木(雄株)です。高さ22m、根回り10.2mで樹齢1200年を超えられています。



そして、昭和6年に市川市域で初めて「国指定天然記念物」に指定されています。

〈千本イチヨウ〉の由来は、多数の幹が寄り集まり、まるで一本の大樹が根元から伸びているように見えることによります。

## 《 八幡の藪しらず (やぶしらず) 》

この《八幡の藪しらず》全国に知られた名所の一つですが、古来多くの話が伝えられています。

それは天慶(てんぎょう)の乱のとき、平貞盛(たいらのさだもり)がこの地に「八門遁甲(はちまんとんこう)の陣を敷いたが死門の一角を残すので、この地に入るものには必ず祟りがあるとの言い伝えがありました。

のちにこの話を聞いた徳川光圀(みつくに)は馬鹿げた話と藪に入ったところ、白髪の老人が現れ「戒めを破って入るとは何事か、汝は貴人であるから罪は許すが、以後戒めを破ってはならぬ」と老人の怒りを被ったといいます。



この他《八幡の藪しらず》については、この地が行徳の入会地(いりあいち)であり、八幡の住民はみだりに入ることが許されず、そのため「八幡知らず」と言われたのが藪しらずになったともいいます。

## クイズ Q (質問) ヒントを参考に考えてみよう!

- Q1 日蓮が生まれた国(古代の国府)は何処ですか?  
(ヒント:房総3国・「下総(しもうさ)・上総(かずさ)・安房(あわ)」)
- Q2 《中山法華経寺》を開山した人は誰ですか?  
(ヒント:頭に「日○」がつく)
- Q3 世界の三大荒行といわれる「日蓮宗の荒行」、「インドのヨーガ」残る一つの荒行は?  
(ヒント:奈良仏教の一つである、「○○宗の千日回峰行(せんにちかいほうぎょう)」)

